おう終り，約480点とその2倍ほどの冊数とがボナー・カタログの第2版に新たにつけ加えられた。それは点数にしてじつに約44%の増加である。ボナー・カタログの冊数は約2240であるから，これにこの『文庫』による追加を合算すれば，スミスの没時の蔵書中現在不明のものはすでにきわめてすくないといえるであろう。

この『文庫』はボナー・カタログへの正確・詳細な追加書目以外に，その後半にボナー，矢内原，およびこの『文庫』のすべての書目を一覧できるようにしたGeneral Check-Listをつけている。この部分では書目の記載はとうぜんに簡略だが，本書がその書名の副題としたようにたんなるA Supplement to Bonar's Catalogueでなく，事実はスミスの蔵書の最も標準的な綜合目録であることが，ここから知られるであろう。ただ以上でわかるように，水田教授の作業の重要な一半を成した，ボナー・カタログの種々のまた多数の記載上の欠陥の修正は，この『文庫』のSupplementには示されていない。それはSupplementとしての紙幅のつごうにもよるが，本書の出版を援助したイギリスの人たちの考えかたに限界があったからであろう。ボナー・カタログの修正の部分は，別に上掲の「アダム・スミスの蔵書」のほうに，89ページにわたってまとめられている。したがって，この『文庫』からSupplementを除いて上の「蔵書」の成果を付加したほうが，スミスの蔵書目録としてはまとまったものとなるはずである。だが，それは目下グラスゴウで準備が進行中の新しいスミス全集のなかでか，それとも独立のかたちでか，やがて実現されることが期待できるであろう。

アダム・スミスの文庫はその全貌があきらかになるにつれて，経済科学の成立の背景にあった広大な思想世界を顕示しつつある。この意味から，水田『蔵書』の功績は大きい。　　［小　林　　昇］

スヴェトザー・ペヨヴィッチ

『ユーゴスラヴィアの経済』

Svetozar Pejovich, *The Market-planned Economy of Yugoslavia*. University of Minnesota Press, Minneapolis, 1966. xii, 160 pp.

1　ユーゴスラヴィア経済は1953年以後社会主義経済のひとつの特殊型として出発して以来それ自体としてきわめて興味ある研究対象である。また1966年以後のソ連の経済改革およびそれと相前後した東ヨーロッパ諸国の経済改革が，ユーゴ経済の従来とってきた方向とかなり似た傾向をうちだしたという意味でも，その理論的実証的研究は社会主義経済学の研究者にとって，現在，きわめて興味ある研究対象である。しかし，ユーゴスラヴィア国民の手になるセルボ・クロアチア語のものを除く，英独露などわれわれの読みうる限りの国語での研究書は比較的少なく，その点，われわれの研究に大きな制約となっている。本書の出現は，そういう意味からいうと，数少ない研究文献に新しい1つを加えたという意味で歓迎される。

2　著者について評者は多くを知らない。この書物に記されている限りを紹介しておくと，著者スヴェトザー・ペヨヴィッチ——正確にどう読むのかわからないので，かりにこうよんでおく——は，ユーゴスラヴィアの生れで，かってミネソタ州のセント・メリー・カレジで教鞭をとったことがあり，本書の出た1966年現在ダラス大学の教授であるという。本書を読んだ限りの印象だけからいうと，まだ若い人ではないかと思う。本書は，全体として非常に試論的な書物であり，理論的な部分がなまのままでしかもかなり教科書風に書かれてあるところへ，実証的な説明が提示され，そのかみ合せというか，実証的な説明の理論的な分析——を著者は志向しているのであるが——が充分に熟した形でなされているとは思われない点などからみて，経済学ないしスラヴ研究の分野で年期をいれた研究者とは思えない。

3　本書はその執筆の趣旨をのべた短い序文のあとに6章から成る本文を持っている。その表題を示すと，つぎのとおりである。

第1章　ユーゴスラヴィア経済の法制的構造
第2章　ユーゴスラヴィアの経済計画化
第3章　ユーゴスラヴィア経済の運営
第4章　ユーゴスラヴィアにおける企業(firm)
第5章　ユーゴスラヴィア経済運営の分析的説明
第6章　結論

以上の本文122ページにたいして，6つの題目について23ページの付論がついている。——1. カール・マルクスと資本主義から社会主義への転化の問題。2. カール・マルクスの科学的社会主義とユーゴスラヴィアの社会主義との対比。3. ヨゼフ・シュンペーターの経済発展理論の若干の重要な特徴。4. 外国貿易，捕捉しうる限りの対外援助，国際銀行からの借款。5. ユーゴスラヴィア企業における労働者管理。6. (経済にかんする)公示文の挙例。これらの付論は，4と5とを除けば，本文における著者の立場を理論的にうらづけようとする意図でここへいれられたもので，このようなやり方は著者がまだこ

の分野では稚い研究者であり，自分の仕事に余り自信をもっていないことを示しているように思われる。われわれにとって大した意味はない。

4 著者の執筆意図はユーゴスラヴィア経済の実証的歴史的説明を与えることでもなく，社会主義経済学への institutional approach をすることでもない。むしろユーゴスラヴィア経済の発展のなかから，地方分権化した社会主義国家が経済活動のレヴェルと資源の分配——したがってまた生産物の構成をも——とをコントルールしうるか，少なくとも旧ソヴェト型の行政＝命令的経済と同じように能率的にコントロールしうるかを示すことによって，オスカー・ランゲによってうちたてられた社会主義の経済学の理論を前進させようというにある。この場合のランゲとは晩年のそれでなく，30年代のランゲすなわちフレッド・テーラーと共著で『社会主義の経済学』を出した1938年のランゲである。

そのような意図で著者はまず，第1—4章において，ユーゴスラヴィア経済発展の諸側面をのべる。この部分は，著者の意図とは若干くいちがうかもしれないが，1963年ごろまでのユーゴスラヴィア経済の推移を，原資料を使って叙述したものとして，とくにわれわれにとっては，資料的意味を持つ。それをうけて第5章では，ヨーゼフ・シュンペーターの経済発展理論がユーゴスラヴィア経済の発展のために恰好の理論的説明になりうると述べる。著者によればシュンペーター理論における経済発展の3つの要素は，(1) freedom to innovate, (2) the availability of economic power to innovate, (3) a system of sufficient incentives であるとして，1953年後のユーゴスラヴィア経済が decentralization と銀行制度の重要視とによって，この3要素を満足させており，その意味でユーゴスラヴィア経済のすみやかな経済発展がシュンペーター理論によって合理的に説明されえたと述べている。そこからでてくる著者の結論は，つぎのように要約されうる。ユーゴスラヴィアの実験は社会主義経済についての Lange 流の static theory に若干の寄与をなしとげた。従来の Static economic theory of socialism の欠陥は macro-economic な決定と micro-economic な決定との相互作用の問題や最大の生産効果をあげるような資源の合理的配分の問題について明確な理論的説明を与えなかった点にある。1953年以後のユーゴスラヴィア経済は，その分権化措置と銀行制度重視の政策により，この問題の具体的な解決を与え，それによって，(第5章で言われているような意味によって)社会主義の経済理論の発展に大きな貢献を与えたというのである。そのような意味で本書は，「ヨーゼフ・シュンペーターの記憶のために」という献辞を冠している。

5 著者は1949年までのユーゴスラヴィア経済が行政的方法の計画化システム，つまり旧ソ連型計画システムをとっていた間は経済の発展が非常に困難をきわめたが，1950年頃から始まり1953年に終った改革および1962—65年の改革によって，経済の decentralization をおこない，銀行の投資配分的機能における自主性——というか指導性というか——が著しく高まったことによって，macro の経済と micro の経済の相互関係もうまく行き，労働者にたいする奨励制度も効果をあげ，資金の配分も合理的になり，著しい経済発展をとげたという。これはシュンペーター理論の有効性を実証するものであるという。果してそうだろうか。以下に評者の意見ないし，本書にたいする評価をのべる。

まず第1に，ユーゴスラヴィア経済を成功的に運営されている経済とみなしていいであろうか，評者はその点を疑う。すくなくとも，「ソヴェト経済は能率的に運営されていないが，ユーゴスラヴィア経済はその逆に能率的に運営されている」という断定を下しうるであろうか。ユーゴスラヴィアの外貨バランスの赤字，dinar の減価とインフレーションについては著者も本書のなかで指摘しているとおりであるが，その意味をどうとるか。また，著者の強調する銀行の投資配分機能についてみても，著者がその最後で "the most important task of the economy seems to be an attempt to improve the efficiency of the banking system." (p. 122) といっていることは，正に著者の議論にたいする痛烈な皮肉に思われる。銀行職員の教養度の低さや，銀行による「自主的」投資配分によるユーゴスラヴィア経済の混乱について，著者は完全に眼をつぶっている。

著者は institutional approach をとらないというが，著者における社会主義の概念がわれわれとは別のものである。というよりは，そういうものが始めから欠けているのである。本書全体を読んでみて，評者はその感じを蔽いえないが，ここでは，余りいい例証とも思えないが，著者のつぎの言葉を引いておこう。

「インドの経済計画の基本原則はユーゴスラヴィアのそれと同じであり，アラブ連合における企業利潤の分配は1953年以後のユーゴスラヴィアで適用された手続きを反映している。」(p. ix) 著者は計画化が macroeconomic variables に限られている点でユーゴスラヴィア，インド，エジプトおよび若干のアジア・アフリカ諸国は同一の計画制度を持っているという。つまり，ここに示

されたような著者の考え方，社会主義的計画化概念の非マルクス主義的な把握から本書のような構想なり，ユーゴスラヴィア経済の「発展」についての著者独自の評価なりが出てくるように思われる。［野々村　一雄］

ジャン・マルシェフスキイ

『国民勘定』

Jean Marczewski, *Comptabilité Nationale*, Paris 1965, ii, 661 pp.

本書の著者であるマルシェフスキイ教授はわが国では一部の専門家を除くとあまり知られていないが，フランスにおける国民経済計算の権威の1人である。このことは本書の叙述の一部を構成しているフランスにおける国民勘定の発展過程についての叙述からも明らかに知られるところであるが，「応用経済学研究所」(l' Institut de Science Economique Appliquée) を拠点として著者がフランスの国民所得の推計と国民勘定の開発に貢献したところは大きい。また International Association for Research in Income and Wealth の報告である *Income and Wealth* の Series へのいくつかの寄稿によっても知られているし，同 Association の Council のメムバーでもある。私はこれ以上彼の経歴について知るところはないが，本書によると現に la Faculté de Droit et des Science économiques de Paris の教授の席を占めているようである。

本書は次の4部から構成され，小型本とは言え660ページに及ぶ大著である。すなわち

第1部　国民勘定の対象と発展
第2部　基礎概念と諸勘定
第3部　経済構造の分析
第4部　国民勘定の拡充

(ただし各部の標題は本書に書かれた標題の直訳ではない)。以下の書評では上記各部の中で重要と思われる論点について簡単な論評を与えるのに止めたい。何分にも前に述べたように本書は大冊であるため与えられた書評のスペースをもって本書の豊富な話題のすべてに言及することは不可能であったことを附記しておかなければならない。

本書の第1部は国民勘定の対象を明らかにするとともに，その発展を歴史的な視野に即して概観している。考察はペティ，グレゴリイ・キング，ケネーなどの初期の国民所得研究にも言及した広汎な内容を持っているが，重点はあくまでも経済循環の体系的な叙述として国民勘定がいかに成立しまた発展して来たかを明らかにすることに置かれている。国民所得研究の歴史としてわれわれはすでに Studenski の大著(P. Studenski, *Income of Nations*, New York 1958) を持っており，著者の広汎な文献の指摘にも拘らず，国民所得研究の発展の流れの歴史的叙述として見れば本書のこの部分は Studenski のそれと比較してなお不完全の感を抱かせるが，著者の叙述の力点を考慮すればほぼ要をつくした概観であると言えよう。このことは Studenski の叙述では必ずしもそれ程多くの叙述を与えていなかった第2次大戦後の国民勘定の研究に多くのページを割いていることからもうかがわれる。ただ本書がこの Studenski の研究に全く言及していないのは不可解である。この他に私がこの部分の叙述で特に注目に値すると思ったのは次の2点である。第1は国民勘定の発展を経済計画および予測の応用との関連において跡づけていることでてある。国民勘定の設計が経済計画や予測の必要に即して開発されて来たことはフランスの(またノールウェイおよびオランダの)重要な特徴の1つだからである。第2は本書がフランスにおける国民勘定の発展について非常に要領のよい叙述を与えていることで，わが国のこの分野の研究者にとって見落すことのできない文献となると思われる。因に著者は OEEC の National Accounts Research Unit の活動の一環としてその国別研究の1巻であるフランス篇を OEEC から出している (J. Marczewski, *National Accounts Studies*: *France*, OEEC, Paris 1952) が，それはフランスの国民経済計算の発展の現状からすればアウト・オブ・デイトの感じを免れない。

第2部は国民勘定の構成要素と勘定の構造を取扱っている。言わば国民勘定の基礎理論に相当する部分である。事実本書でもこの部分に約210ページを費している。著者が経済の network (un réseau économique) の構成要素として列挙しているものは，取引の当事者としての主体と相手方，経済的な活動，主体の資産(財および金融的な請求権)の4つである。以下著者はこれらの個々の構成要素の詳細な議論に入って行くわけであるが，それらの詳細については論評する余裕がない。若干の気のついた点を摘記すると，主体の分割に関して，フランスの国民勘定の部門分割は SNA に見られるような国際的慣行と若干の隔りがある。一般に言って本書は SNA を中心にして国際的な慣行および規準との比較を綿密に行っている。このことは国民勘定の研究にとっては当然かつ不可欠の要件とは言うものの特筆に値する事実であろう。